

和漢連歌について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 義光 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1437

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



和漢連歌について

齋 藤 義 光

連歌の全般的研究の中で、和漢連歌（和漢聯句）の研究は、やや後れているように思われる。しかし鎌倉・室町期の、連歌がその有心性を最も高めたころ、その文雅の媒となったのは、五山の詩僧・公家・連歌師達であった。漢句の雄大・長高な響きが和句の余情に影響し、有心連歌の充実・興陽の契機となったことは否定できない。

後小松院は、南北朝の頃、良基や梵灯庵とも親交があり、応永の頃には仙洞で連歌の会を頻りに催されている。次に掲げる百韻はその代表的一卷である。

大阪天満宮本

応永元年十二月十二日 後小松院御独吟

和漢聯句

ちる雪の花にいとハぬ嵐かな

歳寒梅独芳

北窓晨呵筆

南陌曉露裳

霧うすぎ外山の月ニ旅立て

金風遠くわくる草むら

断続乱蛩闇

去来飛鳥忙

暮かかる浦わの船の員みえて

江畔水徴范

魚永石磯釣

酔闌金殿觴

ひかりそふ花のこのまハ日のさして

霞霽ゆく山の朝あけ

峯こえていまもや帰春の雁

精疲天一方

滴愁孤館雨

黙鬢半閨霜

月しろき枕の上に秋更て

夢もまとをにうつハさころも

やや寒き比にや賤も馴ぬらん

なひく煙ハ竹の夕風

遺賢林下器

美女帳前粧

独座対紅燭

孤眠憐素商

うき思よなよな月も愁きて

契もかれつ露のした草

妻あハぬ野原の鹿の声しほれ

もの寂しきハ山もとの庵

松高煙漠々

榴発火煌々

除熱薰風閣

旧寒朔吹郷

柴の戸をたたく霰の横きりて

人こそとハね冬の奥山

歌声加伐木

酒味更成章

誉遠李兼杜

道洪虞與唐

聖殿新飽瑞

仙術屢呈祥

菊ハこれ遠きよハひの種なれや

浪の花散秋のくに川

月の色移太山に風たちて

啼猿晩断腸

袖かけて寒きこのはやしくるらん

たのむ陰なき佗人の宿

難学一瓢楽

尤寄双鶴翔

軋坤唵典澗

枕簟夢魂長

こてふ社咲花圃をすみかなれ

折しる志賀の故郷の春

浦人ハ沖の霞の綱引て

淑氣鏤瀟湘

佳景須催句

閑時転灯香

行ひハ猶怠らぬ寺ふりて

ふるや軒はの松のむら雨

洞口雲舒卷

波心艇在亡

風むかふ塩瀬に霧の立まよひ

さしくる月の影ハほのほの

釣簾山暮色

首草野春光

農舎鶯兒語

宸宮燕子揚

うららなる風ハ雲井に音信て

万象忽帰陽

民喜昇平化

儒思学業常

隙とめて蛩や窓をてらすらん

みえてハのほる若竹の露

吾なミたころよハくも落そめて

つつむにたへぬ恋のくるしさ

風添団扇帳

絮題少詩狂

春樹緑千里

晚花紅一場

うつろハん心の色ハ見てもうし

おもひたえはや人しれぬ中

惆悵倚欄処

寂寥携杖傍

月昇升る山のすそ野ハ夜になりて

をささのくまにすたく虫の音

をく露の命や仇に頼むらん

よろつうき世そおもへ身の終

禅榻茶煙淡

疎籬竹影藏

披書蘆事少

和琴漏声央

魚躍奔流白

鳥啼寄嶺蒼

松原の埋れし雪のむら消て

かすまぬ月の猶さむきころ

風あるる春の湊もよる舟に

あまの袖まで浪やかくらん

沙際廢樓聳

城辺鳳闕康